View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

昭和女子大学女性文化研究所紀要　第38号（2011.3）

『森林地の人々』におけるグレイスの情熱

柴田　聡子

Grace's Passion in *The Woodlanders*

Satoko Shibata

Grace Melbury is the heroine of *The Woodlanders*. She loves simplicity but is intellectually curious as well. This thesis examines the woman's characteristics in Hardy's novels by analyzing Grace's passion.

The first chapter considers Grace's marriage with Edred Fitzpiers, an intellectually sophisticated man. Her marriage enables her to unite her intellectual life and animal instinct.

The second chapter deals with domestic troubles. Grace suffers from her husband's infidelity, but like 'a released spring,' she recovers her health and determines to 'love his best.'

The third chapter deals with Fitzpiers' teardrops. Grace's tough fibre inspires him and makes him a faithful husband again. They come to respect each other's feelings and work to strengthen their 'reunion.' The motive power is Grace's passion.

Grace's passion consists of hope, delight, sensuality and motherhood. Vitality pulses through the couple. She gives full play to her passion, and her passion is an example of what Hardy took to be the woman's characteristics.

はじめに

トマス・ハーディ（Thomas Hardy, 1840-1928）が執筆した『森林地の人々』（*The Woodlanders*, 1887）[1] では、草木が生い茂る四季折々の自然とリンゴ園から漂う芳香とに包まれた小村リトル・ヒントック（Little Hintock）を舞台に、木こりや材木商、リンゴの収穫や酒造などに携わる村人たちが日常生活を営んでいる。その人々の心には、まるで "The rush of sap in the veins of the trees"（135）が流れているかのように潤いがあり、情感に溢れている。

木漏れ日が森に差し込むとあたりは明るくなり、光が雲で遮られると暗闇に一変する。まるで、生命の宝庫である自然の森が、超自然的な妖魔の住み家と化すかのようである。このように明暗の光景が交互に織り成す森林地に譬えられるように、ここに住む一人ひとりにも多様な側面や、曖昧な人間関係が見られるのである。

この土地で材木商の娘として生まれ育った女主人公のグレイス・メルベリー（Grace

Melbury）も、その一人である。寄宿学校で教育を受けた後[2]、洗練された人物となって帰郷し、田舎娘という素朴な要素と知識人であるという高尚な要素とを合わせ持つグレイスは、許嫁であった幼なじみのジャイルズ・ウィンターボーン（Giles Winterborne）ではなく、リトル・ヒントックにやって来た医者のエドレッド・フィッツピアーズ（Edred Fitzpiers）と結婚する[3]。結ばれた二人は、その後、紆余曲折を経ながらも、再び向上への道をともに歩むのである。その原動力となったのは、いったい何だったのか。

本稿では、人間関係に曖昧さをもっているグレイスがいかに首尾一貫して躍動的な生き方をしていたかということについて、情熱の発露という観点から考察することによって、ハーディが描く女性像を論考する。

1　グレイスの結婚

リトル・ヒントックで生まれ育ったグレイスは、“a vessel of emotion”（57）と譬えられるほど、情緒豊かな娘である。『ダーバヴィル家のテス』（*Tess of the d'Urbervilles*, 1891）の女主人公テス・ダービフィールド（Tess Durbeyfield）も、“Tess Durbeyfield at this time of her life was a mere vessel of emotion untinctured by experience.”（＊下線柴田）[4] と描写されており、この言葉は素朴で多感な田舎娘を比喩した表現であるといえる。森にそよ風が吹いてくると、グレイスは、“Grace's lips sucked in this native air of hers like milk.”（84）と、まるで「ミルク」を飲むように空気を吸い込み、体内に栄養を取り入れる。また、雨が降った後に燐光を発する朽ちた木や葉は、グレイスが道を歩くと、あたかも光る「ミルク」かのように散らばるのである。

ガストン・バシュラール（Gaston Bachelard）は、『水と夢』（*L'Eau et les Rêves*）の中で、水（de l'eau）のことを “un lait inépuisable, le lait de la nature Mère”（無限のミルク、母なる自然のミルク　＊下線日本語訳柴田）[5] と形容している。バシュラールはこの “lait” というイメージを、恋人や妻、そして母という女性の特性と重ね合わせており、暖かく幸福な夜のイメージや明るく包み込むイメージ、さらに大気と水、空と大地を合一し宇宙的で優しいイメージがあるともとらえている。グレイスや乳搾りに従事していたことのあるテスにこのイメージを重ねてみると、グレイスやテスの母性が示唆されているだけではなく、生命力の源泉が暗示されているといえる。グレイスが “Nature was bountiful, ...”（206）と感じたり、テスが乳牛のオールド・プリティ（Old Pretty）と一緒に自然の風景に溶け込むといった描写がなされていることも、自然との調和の中で、女性の生命力が十分に表出されている。それは、樹液が木の幹や枝に上るように自ずと全身に湧き上がるような、希望や歓喜などといった押さえがたい本能でもある。

また、グレイスやテスの口元は、その本能を発揮する象徴ともいえる。テスが愛するエンジェル・クレア（Angel Clare）に与えるキスは、まさに激しく燃え立つ熱情そのものである。

> She[=Tess] clasped his neck, and for the first time Clare learnt what an impassioned woman's kisses were like upon the lips of one whom she loved with all her heart and soul, as Tess loved him. [6]

グレイスにも、テスに劣らないほどの激情あふれる描写が見られる。それは、ウィンターボーンに対するグレイスの誘惑である。グレイスが “I do love Giles: ....”（294）と語ると、身体にはほとばしるような血潮が流れ、自らウィンターボーンに唇を差し出し、長い抱擁と激しい口づけを交わすのである。このように、グレイスやテスは、内に情熱を秘めた魅力に富む女性たちである。

木こりやリンゴ酒商人などといった仕事に携わっているウィンターボーンは、次に描写されているように、苗木を植え付けることが上手な人物である。

> Winterborne's fingers were endowed with a gentle conjuror's touch in spreading the roots of each little tree, resulting in a sort of caress under which the delicate fibres all laid themselves out in their proper directions for growth.（64）

このように、“a marvellous power of making trees grow”（63）を持っているウィンターボーンは、分身であるかのように常に樹木とともに描写されている。市場で見本のリンゴの木をかざして立っているウィンターボーンの姿は、まるでリンゴの木と同化するかのように寄り添っている。そして、次のように、リンゴの香りが快い雰囲気をあたりに漂わせている中で、帰郷するグレイスのことを木とともにひたすら待ち続ける。

> [A]s he always did at this season of the year, with his specimen apple-tree in the midst, the boughs rose above the heads of the farmers, and brought a delightful suggestion of orchards into the heart of the town.（36）

高く空に向かってそびえるリンゴの木にも似て、グレイスに対するウィンターボーンの思いも、真っ直ぐ、謙虚であるといえる。そのウィンターボーンは、『帰郷』（*The Return of the Native*, 1878）の中で、大切な人を陰ながら支えるディゴリー・ヴェン（Diggory Venn）と類似した真摯な心の持ち主でもある。ウィンターボーンとヴェンは、二人とも質素な生活を甘受し、ひたむきに生きる人物なのである。

学業を終えて帰郷したグレイスは、“I love dear old Hintock, *and the people in it*, ...”（67 イタリックは原文のまま）と語るように、昔ながらのリトル・ヒントックへの愛着が蘇り、土地の風情を漂わせるウィンターボーンにも好感を抱いている。グレイスが、ウィンターボーンの家の外壁に落書きされた “lose”（108）という文字を “keep”（108）と書き換えたのは、次のように、グレイスの素朴さが、田舎育ちで飾り気のないウィンターボーン

に呼応しているからであるといえる。

> [I]n the bottom of her heart there pulsed an old simple indigenous feeling favourable to Giles, ...（81）

しかし、豊かな学識や嗜みを身に付けたグレイスの心に、洗練された要素が根を生やし始める。このようなグレイスに知的好奇心を植え付けたのが、山の中腹にあり、以前は空き家だった窓から発する、サファイアのような青色や、菫色、赤色にも輝く光が木の間隠れに瞬いている新奇な現象であったのである。

> Her[=Grace's] curiosity was so widely awakened by the phenomenon that she sat up in bed, and stared steadily at the shine.（47）

これは、研究や深い思索のためにフィッツピアーズが夜通し発していた明かりで、次にあるように、この村の生活とは全く共通点が見出せないものであった。

> Chemical experiments, anatomical projects, and metaphysical conceptions had found a strange home here.（50）

フィッツピアーズは、科学や哲学、詩など広い学識をもった外科医であり、職業上の地位に加えて、名門の家柄の出である。グレイスがこの地を離れている間に、開業のために移り住むようになった。グレイスとフィッツピアーズとの出会いは、メルベリー家の召使いであるグラマー・オリバー（Grammer Oliver）が自分の死後に頭蓋骨をフィッツピアーズに差し出すという奇妙な約束の取消しを願い出るために、グレイスがオリバーの代理でフィッツピアーズの家を訪ねるという風変わりな用事によって果たされる。部屋に通されたグレイスが目にしたのは、長椅子で心地よく眠っている美しいフィッツピアーズの姿であった。その時、グレイスは、まるで「生きた標本」でもあるかのように、フィッツピアーズに好奇な印象を抱く。

> [S]he became aware that she had encountered a specimen of creation altogether unusual in that locality.（128）

この面会の中でフィッツピアーズは、人間の脳の細胞組織が入った顕微鏡をグレイスに覗かせ、驚かすのである。物質と理念の世界の接触点を発見したいと語るフィッツピアーズに対してグレイスは、学問に対する関心から、"'Instead of condemning you for your studies I admire you very much!'"（133）と敬意を示す。

一方、グレイスとの出会いの後、フィッツピアーズは、"'This phenomenal girl will be the light of my life while I am at Hintock; ....'"（134）と、類稀なる女性を発見したことに喜びを感じ、心に活力が漲るようになる。グレイスの洗練された感性が、フィッツピアーズの先駆的な思考と呼応しているのである。

このように、グレイスの素朴さに知的好奇心が接ぎ足される。

Ｊ・Ｓ・ミル（J. S. Mill）が『女性の解放』（*The Subjection of Women*）の中で、"the father had the power to dispose of his daughter in marriage at his own will and pleasure, ..."[7] と述べているように、当時の娘の結婚に関しては、父親が大きな影響力を及ぼしている。父親のメルベリー（Mr. Melbury）は、ウィンターボーンをグレイスの許嫁と決めていたが、学問を身につけさせた娘を定職のないウィンターボーンに嫁がせることに気が進まなくなり、家柄も良く、専門職の医者であるフィッツピアーズとの縁談へと心変わりしていく。他人の考えや行動に同調でき、無邪気な野心も持ち、知性を育んできたグレイスは、"she was proud, as a cultivated woman, to be the wife of a cultivated man."（173）と思い、フィッツピアーズへと心が傾いていく。良縁を願う父親の思いが叶えられた結婚に導かれていくのである。

しかし、娘の幸福を願うのは、メルベリーだけではない。『緑樹の陰で』（*Under the Greenwood Tree*, 1872）のファンシー・デイ（Fancy Day）の父親ジェフリー・デイ（Geoffrey Day）も、その一人である。ジェフリー・デイは、学校の教師である娘ファンシーと運送屋の息子ディック・デューイ（Dick Dewy）との結婚は釣り合わないといったん反対はしたものの、物語の結末では、娘の幸福のためにディックとの結婚を承諾する。父親の理解を得られたファンシーは、周囲に祝福された結婚を果たすことができたのである。

グレイスがフィッツピアーズと結婚する暗示となっているのが、聖ヨハネ祭の前夜に行われる、娘たちの悪ふざけともいえる古くからの行事である。それは、娘たちが未来の伴侶にひと目会える、追いかけっこのような遊びであり、グレイスを捕まえたフィッツピアーズは、"'I am going to claim you, and keep you there all our two lives!'"（148）と生涯を共にする約束を告げる。やがて、二人の心には "the twigs budded on the trees."（135）と譬えられるように、知らない間に愛情という芽が出て、次のように、共通の教養や趣味などから急速に愛情の蕾がほころびるのである。

> Spring weather came on rather suddenly, the unsealing of buds that had long been swollen accomplishing itself in the space of one warm night.（135）

以上のとおり、グレイスは、素朴な面と知的好奇心に満ち溢れた面を合わせ持ち、ウィンターボーンにもフィッツピアーズにも寄り添える要素があった。しかし、フィッツピアーズと一緒にいることで、教養を高め合う心の交わりが可能であることに魅力を感じ、

その上、父親メルベリーの意向や、土地に伝わる遊びによる暗示もあり、グレイスはフィッツピアーズとの結婚を決意する。さらに、チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin）の性淘汰（sexual selection）の理論を裏付けるものとして、田舎の風采をしたウィンターボーンよりも、最新の服装で身を包み、容姿端麗なフィッツピアーズの方を好んだともいえるのである[8]。このように、グレイスの結婚は、知的な生活と動物的な嗜好が絡み合ったものであると考えられる。

2　家庭のいざこざ

教会で結婚式を挙げ、三つの鐘の響きとともに、グレイスとフィッツピアーズは夫婦となる。この作品で “There is no such thing as a stationary love: men are either loving more or loving less; ....”（278）と語られていたり、『緑樹の陰で』のディック・デューイが “Dick wondered how it was that when people were married they could be so blind to romance; ....”[9] と情熱が色あせてしまうことを不思議に思ったりしているように、フィッツピアーズのグレイスへの愛情にも、やがては心の移ろいが生じてしまうのだろうか。

結婚後、二人の生活の拠点となったのは、経済的な援助も受けられるグレイスの実家であった。材木商であるグレイスの両親や近所の知り合いとの付き合いに、フィッツピアーズはやがて馴染めなくなり、次に語るように、森の旧式な生活様式に嫌悪を示すようになる。

> “If we continue in these rooms there must be no mixing in with your people below. I can’t stand it, and that’s the truth.”（183）

『日陰者ジュード』（*Jude the Obscure*, 1895）の主人公ジュード・フォーリー（Jude Fawley）は、妻となるアラベラ・ドン（Arabella Donn）の家族との付き合いに当惑してしまうものの、“His[=Jude’s] idea of her was the thing of most consequence, not Arabella herself, ...”[10] と自分に言い聞かせながら、アラベラを大切に思おうとする。もしも、フィッツピアーズがグレイスのことを、ジュードがアラベラをとらえているように真面目な気持ちで考えていたとすれば、“I stooped to mate beneath me; and now I rue it.”（255）といった後悔をすることはなかったといえる。しかも、“much preferred the ideal world to the real”（112）であるフィッツピアーズは、スーク・ダムソン（Suke Damson）やチャーモンド夫人（Mrs. Charmond）といった女性たちと節操に欠けた過ちを引き起こしてしまうのである。村のお転婆娘である豊満なスーク・ダムソンは、聖ヨハネ祭の前夜の行事で、フィッツピアーズのことを恋人と勘違いして、“‘May’st kiss me if ‘canst catch me, ...!’”（149）と、走りながら肩越しに投げキスを送り続ける。腕もあらわで体格もよく、月光を浴びて美しいスーク・ダムソンに追いついたフィッツピアーズは、スークの思い違いを利用して誘惑する。また、ヒントック邸宅に住むチャーモンド夫人は、“She liked mystery, in her life, in

her love, in her history.”（195）とあるように、ロマンチックな恋愛を好む未亡人である。チャーモンド夫人を乗せていた馬車が傾き、腕のかすり傷の治療のためにフィッツピアーズを往診に頼むことで、二人は再会を果たす。フィッツピアーズは、娘の頃のチャーモンド夫人に情熱の萌芽ともいえる恋を抱いていた。若き日の恋心が蘇ったフィッツピアーズは、チャーモンド夫人との甘美な夢を追い求め、駈け落ちをするのである。

グレイスの父親メルベリーは、たとえ一時であろうと他の女性たちに目がくらんだフィッツピアーズに対して、次のような驚きと悲しみを感じている。

> In the pure and simple life he had led it had scarcely occurred to him that after marriage a man might be faithless.（214）

イアン・グレガー（Ian Gregor）が、“Fitzpiers playing the part of the romantic seducer, ...”[11] と述べているように、フィッツピアーズの愛情はその場限りの熱情、恋愛遊戯なのである。

このように、フィッツピアーズの不実が、家庭にいざこざの種を蒔く。グレイスの心は大きな打撃を受け、次にあるような苦悩を背負い込むこととなるのである。

> [W]ho[=Grace] combined modern nerves with primitive emotions, and was doomed by such co-existence to be numbered among the distressed, and to take her scourgings to their exquisite extremity.（298）

グレイスの心労の重さは、“Because cultivation has only brought me inconveniences and troubles ....”（221）と、父親のメルベリーに語る苦渋に満ちた言葉となって溢れ出す。さらに、“‘I am what I feel, ...’”（220）と感受性の強さを力説するグレイスは、ひどい仕打ちを受けたフィッツピアーズから自分のもとに戻って来てほしいと頼まれても、“‘I could not live with you.’”（345）と、承諾を躊躇するのである。このように、信じる者からの裏切りによって、グレイスの心は失意の底に沈むのである。しかし、ヒントックの森で「ミルク」を飲むように空気を吸い込むグレイスは、樹液が満ちて弾力のある大枝のように、心が弾むバネ（a released spring（206））となって再び元気を取り戻していく。そして、情熱に満ちた薔薇色の生気が蘇り、希望の持てる状態にまで回復する。その結果、グレイスは、次のように決意の力を信じようとする。

> [T]he determination to love one’s best will carry a heart a long way towards making that best an ever-growing thing.（204）

グレイスと同じように教養も嗜みも十分にある『帰郷』の女主人公ユーステイシア・

ヴァイ（Eustacia Vye）は、有史以前の大地の様相を醸し出すエグドン・ヒース（Egdon Heath）で、心を憂鬱にさせるほど退屈な生活に希望を見出せないまま日々を過ごしており、この土地を離れて華やかな都会に行くことに強い憧れを抱いていた。しかし、ユーステイシアは、物語の最後までエグドン・ヒースから一歩も外に出ることはない。気も狂うほどに愛されたいと願うユーステイシアは、“Love was to her the one cordial which could drive away the eating loneliness of her days.”[12] とあるように、愛を “the one cordial” としてとらえている。夫となるクリム・ヨーブライト（Clym Yeobright）に “One touch on that mouth again; there, and there, and there.”[13] と語らせるユーステイシアは、まるでかがり火の化身のようであり、この時ほど、クリムの心を愛情の炎で包み込んだ瞬間はないといえる。

このように、グレイスやユーステイシアの沈鬱な感情を希望に満ちた生きる原動力に変えているのは、グレイスでは「ミルク」に譬えられ、ユーステイシアではかがり火の炎に象徴される情熱であるといえる。

以上のとおり、“Grace clung to her position like a limpet.”（237）と描かれるグレイスは、家庭のいざこざといった困難を乗り越えるため、生への活力の源である情熱によって、苦難を前向きにとらえ、再びフィッツピアーズと向き合う決意をしていくのである。

3　フィッツピアーズの涙

グレイスがフィッツピアーズに抱いた結婚前の関心は、自分よりも優れた人物に対する尊敬の念に似ていた。それは、神秘や奇異（mystery and strangeness（203））に対する畏敬でもあった。しかし、フィッツピアーズの一番良い点としてグレイスが尊敬していたのは、医者としての腕前である。

> One speciality of Fitzpiers was respected by Grace as much as ever: his professional skill. In this she was right.（316）

一方、フィッツピアーズは、次にあるように、村人たちからは悪魔との共謀者（in league with the devil（8））でもあるかのように噂されている風変わりな人物としても描写されている。

> “It seems that our new neighbour, this young Doctor What’s-his-name, is a strange, deep, perusing gentleman; and there’s good reason for supposing he has sold his soul to the wicked one.”（30）

しかし、グレイスは、村人たちの評判に反して、フィッツピアーズのことを “‘Not fiendish – strange.’”（131）と感じている。

このように多様な見方をされるフィッツピアーズについて、Ｊ・Ｏ・ベイリー（J. O. Bailey）は “Dr. Fitzpiers was looked upon as a kind of Faust by the woodlanders.”[14]（＊下線柴田）と述べ、フィッツピアーズは村人たちによって “Faust” らしきものとしてとらえられていると指摘している。つまり、詐欺師的な魔術師とされる人物像が原型であると考えられるのである[15]。そのフィッツピアーズがかける魔術には、次にあるように、あらゆるものが受け身になってしまい、意識ははっきりしているのにどうしても動けないといった威圧的な雰囲気が漂う。

> The tree-trunks, the road, the outbuildings, the garden every object, wore that aspect of mesmeric fixity which the suspensive quietude of daybreak lends to such scenes. Helpless immobility seemed to be combined with intense consciousness; ....（166-167）

フィッツピアーズはグレイスにもこの魔術をかけていく。例えば、グレイスにスーク・ダムソンとの関係を疑われた時も、もっともらしい言い訳で説き伏せるのである。その魔術によって自分の思いどおりにできるフィッツピアーズのことを、グレイスは、次のように “her ruler” と感じている。

> [H]e seemed to be her ruler rather than her equal, protector, and dear familiar friend.（166）

このように、フィッツピアーズは医者であるだけではなく魔術師でもあり、科学性と神秘性とが同居した人物なのである。

マイケル・ミルゲイト（Michael Millgate）[16] やリチャード・リトル・パーディー（Richard Little Purdy）[17] は、この作品のタイトルとして、*The Woodlanders* と *Fitzpiers at Hintock* の二つが候補になっていたことを記しており、仮に、この作品のタイトルが後者であったならば、ヒントックの森に住み、極めて風変わりなフィッツピアーズが主人公として登場していたことになる。『帰郷』の紅殻売り（reddleman）であるヴェンが “singular in colour, this being a lurid red”[18] と表現されるように、“red” が風変わりを象徴するものとして用いられており、これは、作品に非日常的な要素を醸し出すばかりではなく、エグドン・ヒースに根ざした伝統や風習を維持する役割がヴェンに託されていることを暗示しているのである。フィッツピアーズのファーストネームのEdredには “red” という文字が隠されているため、reddlemanであるヴェンの役割を『森林地の人々』ではフィッツピアーズが担うことになると考えられる点で、フィッツピアーズという人物の重要性が浮き彫りにされるといえる。しかし、最終的に *The Woodlanders* というタイトルになったことで、このような風変わりな人物が時代の移り変わりとともに影の薄い存在となり、土地に根ざ

した習慣などもだんだんと受け継がれなくなってしまうという暗示がこの作品に埋め込まれることとなった。まさにハーディが危惧していた社会の流れになりつつあるといえる[19]。

ただし、別の見方をすれば、このタイトルによって、個々人の性質が曖昧になり、複雑で分かりにくい人間模様が織り込まれた作品に仕上がったともいえる。その上、ハーディは、自分の思いどおりにはいかない社会において、一人ひとりにどのように最大の幸福を与えるかということを思案しており[20]、フィッツピアーズに限らず、グレイスをはじめ森に住む誰もが皆、幸福になり得るという可能性を模索したのである。この幸福とは、探し出すことではなく、自らが気付くことにより得られるものであり、フィッツピアーズは次のような出来事の後、グレイスによってそのことに気付かされることとなる。

グレイスが病人のウィンターボーンの容態を案じて、医者の助けが必要であると感じた時、最初に頭に浮かんだのは、腕のあるフィッツピアーズだった。往診を頼みに出かけたグレイスは、駆けつけて来たフィッツピアーズに会い、医者が目の前にいるという満足感で安堵する。快楽に走ったことへの悔恨もあり、実直な生活を心がけようとしていたフィッツピアーズは、それまでなおざりにしていた医者としての熱意が喚起され、ウィンターボーンの診察にあたる。そして、ウィンターボーンの看病で病に感染している可能性があるグレイスに対して薬を手渡し、発病した際に飲むように勧める。今まで医者としての腕を信じてきたグレイスの行動がフィッツピアーズの心に職業魂を再び吹き込んだといえる。

一方、常にグレイスの信頼に応えてきたウィンターボーンの死は、立派な人格でいることの意義をグレイスに痛感させるのである。

> Nothing ever had brought home to her with such force as this death how little acquirements and culture weigh beside sterling personal character.（334）

グレイスは、フィッツピアーズについて、“Could it be that she might make of him a true and worthy husband yet?”（354）と、真摯な心を植え付けようとの思いをめぐらすのである。そして、恒久的な愛情のために、お互いの弱点を補い助け合う新たな土壌（a new foundation（203））が必要であることを実感する。生きることへの情熱を持ち続けるグレイスによって、生命を預かる医者である自分に気付かされたフィッツピアーズは、その後、グレイスの意思を尊重しながら、謙虚な気持ちで再び会いたいと願い出る。そして、グレイスが “He certainly had changed.”（353-354）とフィッツピアーズの心情の変化をはっきりと目の当たりにする場面がある。それは、仕掛けられた罠でグレイスが命を失ったと思い込み、作品の中で唯一涙を流していなかったフィッツピアーズが、一度だけ、涙の粒を落とした時である。フィッツピアーズは、グレイスを裏切ったことで受けた仕打ちの中でもっとも厳しい罰により、絶望の気持ちで地面に打ち伏し、グレイスの服の端切れの上で身を揺すって嘆く。その大きな嘆きの声を聞いたグレイスが目の前に現れると、

フィッツピアーズは驚きと嬉しさで両腕をしっかりとグレイスの身体にまわし、激しくキスをする。この時ほど、フィッツピアーズがグレイスのことをかけがえのない大切な人と思った瞬間はないだろう。恐ろしさから脱して喜びと安堵ですすり泣くフィッツピアーズの姿がすべてを物語っている。

> He clasped his arms completely round, pressed her to his breast, and kissed her passionately.
>
> "You are not dead! － you are not hurt! Thank God － thank God!" he said, almost sobbing in his delight and relief from the horror of his apprehension.（356）

女性の衣服についての記述として、『窮余の策』（*Desperate Remedies,* 1871）の中で "His clothes are something exterior to every man; but to a woman her dress is part of her body."（136）とか、"By the slightest hyperbole it may be said that her dress has sensation."（136）といった表現がある。この言葉を借りれば、グレイスの服はグレイスの肉体の一部ということになる。罠に引っ掛かったグレイスの服の上でフィッツピアーズが嘆く場面はグレイスの肉体と結びつき、フィッツピアーズの性的感覚を刺激する。この描写は、グレイスが肉感的な女性であることを示唆するものと考えられるため、グレイスには官能的な要素があるといえるのである。

さらに、グレイスに魅了されるのは、フィッツピアーズやウィンターボーンばかりではない。チャーモンド夫人もその一人である。チャーモンド夫人は、ヒントック邸の鏡に映るグレイスの美しい容姿を見て嫉妬心を抱くほど惹きつけられる。その感情がより一層たかぶるのは、ヒントックの森の中での出来事である。森で道に迷ったグレイスとチャーモンド夫人は 3 月の夜の寒さや冷たい風、降りしきる雨に身が凍えそうになる。身体を寄せ合えば互いに暖かくなるというチャーモンド夫人の提案で、二人は "They consequently crept up to one another, ..."（240）とあるように、しっかりと抱き合う。顔を寄せて来るチャーモンド夫人のことを "uncontrollable feelings were germinating"（241）とグレイスが感じるほど、チャーモンド夫人もグレイスを性的な愛情の対象者とみなしていると考えられる[21]。

以上のとおり、フィッツピアーズがグレイスを抱きしめて一度だけ涙を流す場面は、フィッツピアーズに感情のある人間性が呼び起こされる瞬間である。グレイスに優しく敬意を示し、穏やかな態度で接するフィッツピアーズに、グレイスは初めて繊細な心遣いを感じ取る。このように、二人は、お互いに向上の道へとつながる新たな土壌を築きあげるのである。

おわりに

緑豊かな森林で生まれ育ち、教養が素朴さに接ぎ木されたような性格のグレイスは、熟

慮の末に、科学にも哲学にも通じ、知的で新奇な趣のあるフィッツピアーズを夫に選ぶ。フィッツピアーズの不実によって一時は苦悩に陥るが、足元をしっかりと地面につけて生きていこうとする堅固な気性で、夫と向き合い、夫の心情を変え、自分の存在感を高めることを可能にしていく。そのことにより、フィッツピアーズの内面を育てていくといった人間性の深化が成し遂げられたともいえる。二人は、尊重し合う喜びを味わい、お互いに導かれながら、再び結ばれていく。その原動力となったのは、まぎれもなくグレイスの生への情熱なのである。母性や動物的な嗜好、希望や歓喜から湧き上がる本能、激しく燃え立つ感情や官能的な要素などに見られるグレイスの情熱には、栄養摂取や生長、生殖などといった人間として存在し得る本源から抽象される「生命力」が脈打っている。グレイスのこの情熱の発露が、困難を乗り越えて前に向かって歩んでいこうとする力を生み出し、フィッツピアーズとの “reunion”（358）を可能にしたのである。ここにこそ、まさにグレイスの生きることへの情熱が際立って発揮されており、躍動感あふれるグレイスの生き方が表されているといえる。

註

1 Thomas Hardy, *The Woodlanders* (London: Penguin, 1998). をテクストとする。

2 『緑樹の陰で』（*Under the Greenwood Tree*, 1872）の中で、ファンシー・デイの父親ジェフリー・デイとディック・デューイとの会話において、ファンシーは寄宿学校で行儀作法や上品な話し方、音楽の心得、本を読むことなどを身につけた後、師範学校に入り、教師になったと語られている。グレイスが在籍した寄宿学校でも、行儀作法から学問に至るまでの教育がなされていたと考えられる。

3 グレイスとフィッツピアーズとの結婚は、ハーディが本作品の序文の中で次のように述べている結婚観を具現化していると考えられる。
From the point of view of marriage as a distinct covenant or undertaking, decided on by two people fully cognizant of all its possible issues, and competent to carry them through, this assumption is, of course, logical.（368）

4 Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (Oxford: Oxford University Press, 2005), p.21.

5 Gaston Bachelard. *L'eau et les Rêves: Essai sur l'imagination de la matière* (Paris: Librairie José Corti, 1942) Chapitre V: 'L'Eau Maternelle et L'Eau Féminine.', p.171.

6 Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles*, p.208.

7 John Stuart Mill. *The Subjection of Women*. (London: Longmans, 1869), p.54.

8 ダーウィンは、『人間の進化と性淘汰』（*The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*）の中で、生物進化の要因の一つとして性淘汰（雌雄淘汰）の理論を唱えている。その中で、配偶を得るのに適した形質を具えるものは、よく子孫を遺し得るから、その形質は永く伝わって発達したと説いている。例えば、鳥獣や昆虫の雄などの美しい色や鳴き声、発達した角や触覚など、雄の特定の形質が進化することを挙げている。また、ダーウィンは雌には選り好みをする力があり、雄の美しさは繁殖期に一番顕著になるため、美しく飾られた雄が好まれるともとらえている。

9 Thomas Hardy, *Under the Greenwood Tree* (Oxford, New York: Oxford University Press, 1999), p.62.

10 Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (London: Norton, 1999), p.48.

11　Ian Gregor. *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction* (London: Faber and Faber, 1974), p.151.

12　Thomas Hardy, *The Return of the Native* (London: Penguin, 1999), p.69.

13　*Ibid.* p.193.

14　J. O. Bailey. 'Hardy's "Mephistophelean Visitants"' *PMLA 61,* 1946, p.1165.

15　Ｊ・Ｏ・ベイリーが取り上げているFaustとは、ドイツの伝説的人物ファウストであると考えられる。このファウストは、パーマー（Philip Mason Palmer）とモア（Robert Pattison More）の *The Sources of the Faust Tradition* には、"the notorious German magician, Doctor Faust"（3）とか、"the existence of a historical Faust is of varying value."（81）と記されている。

16　マイケル・ミルゲイトは *Thomas Hardy: A Biography* の中で、"in mid-November 1885, when he[=Hardy] was still calling the newer novel *Fitzpiers at Hintock,* ...."（269）と記している。

17　リチャード・リトル・パーディーは *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* の中で、次のように述べている。

In March 1886 he[=Hardy] had offered Macmillan the choice of two titles for the novel, 'The Woodlanders' and 'Fitzpiers at Hintock', and Frederick Macmillan and Mowbray Morris, the magazine's editor, promptly chose the former.（57）

18　Thomas Hardy, *The Return of the Native* (London: Penguin, 1999), p.13.

19　詳細は、拙論「『帰郷』における風変わりな世界－トマス・ハーディにおける非日常性とは何か－」（*Evergreen*（第30号）昭和女子大学大学院英米文学研究会、2010、pp.21-41.）を参照。

20　ハーディは、序文で次のように述べている。

How to afford the greatest happiness to the units of human society during their brief transit through this sorry world, ...（368）

21　このような描写は、『窮余の策』のシシーリア・グレイ（Cytherea Graye）とミス・オールドクリフ（Miss Aldclyffe）の親密なベッドの場面を想起させる。

Bibliography

Text

Hardy, Thomas. *The Woodlanders.* London: Penguin, 1998.

Hardy, Thomas. *Desperate Remedies.* London: Penguin, 1998.

Hardy, Thomas. *Under the Greenwood Tree*. Oxford: Oxford University Press, 1999.

Hardy, Thomas. *The Return of the Native.* Oxford: Oxford University Press, 2005.

Hardy, Thomas. *Tess of the d'Urbervilles*. Oxford: Oxford University Press, 2005.

Hardy, Thomas. *Jude the Obscure.* London: Norton, 1999.

Criticism

Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*.
New York, London: W. W. Norton & Company, 1973.

Bachelard, Gaston. *L'eau et les Rêves: Essai sur l'imagination de la matière.*
Paris: Librairie José Corti, 1942.

Bailey, J. O. 'Hardy's "Mephistophelean Visitants"' *PMLA 61,* 1946.

Butler, E. M. *The Fortunes of Faust.*
Cambridge: Cambridge University Press, 1952.

Darwin, Charles. *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex.*
London: Penguin, 2004.

Dutta, Shanta. *Ambivalence in Hardy: A Study of his Attitude to Women.*
Houndmills, Basingstoke, Hampshire and London: Macmillan Press Ltd, 2000.
Gregor, Ian. *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction.*
London: Faber and Faber, 1974.
Hardy, Florence Emily. *The Early Life of Thomas Hardy. 1840-1891*
London: Macmillan, 1928.
Hardy, Florence Emily. *The Later Years of Thomas Hardy. 1892-1928*
London: Macmillan, 1930.
Mill, John Stuart. *The Subjection of Women*.
London: Longmans, 1869.
Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography.*
New York: Random House, 1982.
Millgate, Michael. *Thomas Hardy: His Career as a Novelist.*
London: The Bodley Head, 1971.
Palmer, Philip Mason. and More, Robert Pattison. *The Sources of The Faust Tradition from Simon Magus to Lessing.*
New York: Haskell House Publishers, 1965.
Purdy, Richard Little. *Thomas Hardy: A Bibliographical Study.*
London: Oxford University Press, 1954.
Purdy, Richard Little and Millgate, Michael eds. *The Collected Letters of Thomas Hardy.*
Oxford: The Clarendon Press, 1978-1987.
深澤　俊『ハーディ小事典』東京、研究社、1993年。
日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』東京、音羽書房鶴見書店、2007年。

＊本稿は、2010年10月30日に、同志社女子大学で開催された日本ハーディ協会第53回大会において、口頭発表した内容を加筆訂正したものである。

（しばた　さとこ　総合教育センター非常勤講師　女性文化研究所研究員）